史上最強の男、魔法世界へ

リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
史上最強の男、魔法世界へ

【Ｎコード】
Ｎ１５６２Ｙ

【作者名】
リーゼ

【あらすじ】
以前に書いた「最強の騎士・魔法世界に行く」のリメイクです。
ただ、色々と改編してますので以前の方が面白いと思う人もいると思いますが、その辺はご容赦ください

第０話　史上最強の男、別世界へ（前書き）

第０話です。

修正しました。

第０話　史上最強の男、別世界へ

いやぁ、思えば人生長かったなぁ……。
いきなりイケメン神に殺されてＩＳの世界に飛ばされて色んな奴等とやりあって……。
ある事件のあとに千冬とめでたくゴールインして子供も何人か出来た……。
……末の娘は間違いなく千冬の性格を丸々受け継いでるなぁ……（苦笑）
子供の頃はあんなに可愛かったのに……（泣）

「やぁ、久し振りだね！」

「そんなイケメン何ぞに嫁に行かせてたまるかぁぁぁぁっ！！」

ガァンッ！

「ゴホァッ！……久し振りに会って早々、いきなり暴力っ！？」

「あ……久し振りじゃないか、イケメン神！」

娘がイケメンに取られたことを思い出して殴ったら目の前に頬を赤く腫らしたイケメン神がいた。

「つか、何か怒ってるか……？それに、そんなに頬を赤く腫れ上がらせて……虫歯か？」

「君がやったんじゃないかっ！！……まぁそんな所も変わってなかったみたいだね？」

「そんな誉めないでくれ……ちょっと照れるから……」

「明らかに誉めてないんだけどね……まぁいいや、余り時間もないし……」

さっきまでおちゃらけてた雰囲気が消え、真剣な表情で俺に言い放った。

「本当だったら君を天国に迎えに行く予定だったんだけど、ちょっと予定が狂ってね……」

「（イカれてるのはお前の定義そのものだけどな）……天国、ねぇ……あんだけ人を殺したってのにか？」

俺は生きていた頃は仕方無しに人を殺した……。

一夏や他の皆は仕方ないと言ってはくれたが、その事に関しては死んだ今でも心の中に残っていた……。

「アレは仕方なかったんだよ……そうするしか方法はなかったしね……それで、君に頼みがあるんだ……あの世界で史上最強だった君にね……」

最強、か……。

そんな称号（モン）、別に欲しくもなかったんだがな…気が付いたら当時最強だったヤツを倒したらそう呼ばれていただけであったんだが……。

「それで……？こんなヨボヨボの爺様を捕まえて神であるアンタが俺になんの依頼があるってんだ？」

「そう卑屈にならないでくれ……君に頼みたい事は1つだけだから……実は別の世界に行ってバグを排除してくれないか……？」

「バグ……何だ、それ……？」

何かいいイメージ抱きそうもない単語だなぁ……。

「バグと言うのは僕達神の負の遺産の1つさ……僕達にも手に負えなかったのでね、封印されてたんだけど……」

「それを何処ぞのバカが封印を解いて別の世界に送り込んだと……そういうわけか？」

「……」

イケメン神は苦々しい表情で頷いた。

全く……お前らの尻拭いを俺に押し付けるなよなぁ…

「それが何で俺なんかに頼みにくるんだ？……俺はお前らからしたら只のちっぽけな人間だぞ？」

「言ったろ？僕達には手に負えなかったって……それで君に頼むことにしたんだ……人間でありながら僕達神を遥かに越えた力と知識を持つ人間（キミ）にね……」

「……」

そう、イケメン神の言った通り……ある事件を境に俺は神をも圧倒的に越えた力と知識を得てしまったのだ……。

それを知ったコイツらの上の奴等は俺を抹殺しようとしたらしいが、コイツがそれを命懸けで阻止してくれたために俺は人としての生を全うできたのだ……。
……やれやれ、コイツには返しきれない恩が大きすぎるなぁ……。

「わかったよ、引き受けてやる……」

それを聞くとイケメン神は顔を明るくさせた。
……どうやら、コイツらでも手に負えないっていうのも満更嘘って訳でもなさそうだな……。

「そうかい、ならさっそく……」

「その前に1ついいか……千冬に会わせてくれないか？」

伝えるなら自分の口から言いたいしな……。
それに、自分の子供達や一夏達の様子も気になるだろうし……

「それなら連れてきてるよ……君に会えると聞いていても立ってもいられ……」

「……それ以上喋ると、楽しい楽しいＯＨＡＮＡＳＨＩが待っているぞ……？」

イケメン神の背後から懐かしい声が聞こえた……。
長年連れ添い、先に逝ってしまった連れ合いの声を…

「千冬……」

「……ひ、久し振りだな、直哉……」

俺は久し振りの千冬を前にして声を震わせてしまった……。
それは千冬も同じで言葉をつっかえながら目を涙で潤ませていた。

「それじゃ、僕は少しの間消えてるから2人で存分に話してなよ……」

「……ああ、ありがとうな……」

イケメン神は気を効かせてその場から居なくなった。……正直、こういう気遣いはありがたい……。

「……」

「……」

俺たちの間を沈黙が包む…正直、話したいことが腐るほどあったんだがこういう時はなんと言えばいいんだろう……。

「直哉……こ、子供達はどうなったんだ……？」

重苦しい沈黙を破るように千冬が口を開いた……。

「あ、ああ……元気にやっているよ……一夏達も年食ったのにまだまだ元気過ぎるけどな……」

「そうか……一夏やあの愚義妹（いもうと）達も元気か……」

千冬のおかげか、俺もスムーズに言葉が並べられた。……ホント、こういう時に頼りになるな……。
ちなみに一夏や一夏に好意を持っている女性の方々は俺達がＩＳ学園を卒業後に新たな法律が発足され、一夫多妻制が導入されハーレム婚となっていた。
……色々と御都合な感じはしたけど、千冬一筋の俺には関係無いな。
……と、話が逸れたな。

「……行くのだろう、あの神の依頼を受けて……」
「……すまんね……アイツには返しきれない恩があるからさ……」
「……そうか……ならば行ってこい！……そして無事に私の所に戻ってくるんだ……」
最後は目に涙を溜めて千冬は俺に言った……。
千冬も辛いんだよな……俺は千冬に近づいてその体を抱き締めた……。

「……行ってくるよ、千冬……」
「うっ……くっ……直哉ぁ……」
俺に抱き締められた事で千冬のナニかが決壊し、俺の胸の中で嗚咽を上げ、涙を溢した……。

「……」

俺はそのまま黙って千冬を抱き締め続けた……。
無垢な幼子の様に泣きじゃくる千冬を……。
俺の大事な、大事な愛しい人を……。

そうしてしばらくして千冬は泣き止み、顔を赤く染め上げて俺から離れた。
それと同時にイケメン神も姿を現した。

「話は終わったかい……？」

「ああ、わざわざありがとうな……千冬に会わせてくれて……」

「これくらい、お安い御用だよ……それじゃぁそろそろ行こうか……」

イケメン神は念じて空間に扉を現れさせた。

さぁ、挨拶も済んだ……！千冬とはしばらくは会えなくなるが、これが終わったらまた会えるさ……。

「今回の件は本当に済まない……僕達の尻拭いをさせる形になってしまって……」

「そう思うなら俺と千冬に何か奢れよ？」

俺は申し訳なさそうな顔をしているイケメン神を茶化した。
別に今生の別れじゃないんだからよ？

「フフッ……ああ、その時は好きなものをおごらせてもらうよ！」

「ならその時は覚悟しておくのだな？……私を直哉と離れ離れにさせた罪は重いぞ？」

「そりゃいいな！……さぁて、何を奢ってもらおっかなぁ♪」

「……なるべく高価なのは勘弁ね……」

「……プッ」

「クククッ……」

「ハハハハハッ…」

お互いに見合った後、俺達はそのまま軽く笑いあった。
しばらくはこんなやり取りが出来なくなると思うと、少し寂しいが

……。

「ああっ！1つ言い忘れてたよ！」

いきなりイケメン神が声を上げた。

何だよ、人が折角気合い入れて行こうとしたのに……

「どうした？お別れのハグでもして欲しいってか？」

「あのね、君たちじゃないんだから……そうじゃなくて君のテックシステムは一時封印させてもらうよ」

「……まぁ昔ならいざ知らず今のブレードは強力すぎるからな……となると、やっぱアレか？」

アレと言うのはコレもある事件で起きた時に手に入れた力で強力には強力なのだが……

「アレは直哉の身体に相当な負担がかかる筈だぞ？」

「千冬の言う通りだぞ？アレのせいで俺、何度か死にかけたんだぞ」

そう、身体にかかる負荷がハンパないのだ。

一度使ったのだが、その時は体の筋が切断していて治るのにかなりの時間を要したのだ。

それからは極力使わないようにしてはいたが……。

「それに関しては心配ないよ……君の身体をアレに最適の状態に再構成するから」

「……何か、ますます人外化してないか俺？」

「……否定できないな……」

「まぁまだ人間だけど、どちらかと言えば神に近いからねぇ」

俺をそんな風にしたやつが言うことじゃないと思うけどな……？

「というわけで、ほいっ！」

俺の左腕が淡く輝き、それが止むと左腕に大きく鬼のような刺青が彫られていた。

「……これでアレの使用時には君の身体の負担は相当軽くなるよ」

「……これじゃ銭湯に行けねぇぞ……」

「突っ込むところそこなんだ……まぁいいや、それじゃよろしく頼むよ」

まぁいいか……。

んじゃ、気合い入れて行きますか！

「直哉、気を付けてな……」

「あぁ、千冬も元気でな……一夏達がそっちに来たらよろしく伝えといてくれ」

「フッ……わかった」

そうして俺はイケメン神の開いたゲートを潜り、旅立っていった。

こうして、史上最強の男は別世界へと旅立っていった。
男に待ち受けるものは果たして……！？

第０話　史上最強の男、別世界へ（後書き）

次回は第１話です。

第1話　魔法世界（前書き）

短い上にグッダグダです。

ちなみにこの作品では直哉はテッカマンブレードにはなりません！

鬼神降臨伝ＯＮＩのアレになります。

わからない人はググるか何かして調べた方が早いです

第1話　魔法世界

よう！あのイケメン神に別世界に送られた如月直哉だ！
今ちょっと立て込んでるんだがね……！
え？何でかって……。
そいつはな……！

「グルァァァァァァァッ！！」

ドゴォッ！！

「おっと！アブねぇっ！！」

今、変な化けモンに絡まれてるからだよ！！
つか、何だあの化けモン！？
首長いわ、頭２つ付いてるわ、尻尾に何か刺々しいモン付いてるわ、体でかいわ、全身鱗で包まれてるわで間違いなく友好的じゃねぇぞっ！？

しかも俺を餌を見る目で見てやがるし……。
こっち来て早々、こんな目に合うなんざ聞いてねぇぞ！！
あの野郎っ！もうちょい安全な場所に送り込めよっ！？

「ガァァァァァァァッ！！」

ドッゴォォォォンッ！！！

「どわぁっ！？今尻尾スレスレで当たりかけたぞ！！」
棘かすったしっ！？あぁっもうっ！しつけぇなっ！！つか、何で俺逃げてんだ？アレでやっちまえばいいんじゃないか？ヤツも身体の負担はかなり軽減するって言ってたし…
「物は試しだな……やってみるかっ！！」
俺は逃げるのを止めて化け物に向き直った。
「グルルルルッ……」
「お前には悪いけどな……実験台になってもらうぜ？」
カッ！
左腕の刺青が輝き、蒼い閃光が俺を包み込み俺の身体が徐々に変化していく。
「うぉぉぉぉぉぁぁぁぁぁっ！！！」
閃光が止み、そこに立っていたのは白い肌を蒼き鎧に身を包み込んだ『鬼』がいた。
「ふぅぅぅぅ……かなり楽になったな……疲労を全く感じない……」
俺が手を握ったり開いたりしていると……。
「グ……グルァァァァァァァッ！！！！」

無視されていたのを怒った化け物が突撃してきた！

「おっと……そんなにがっつくなよ？」

飛び上がって化け物の頭の上に立ち、茶化した。

やっぱりブレードの時に比べるとちょっとばかり動きづらいが、贅沢は言えないか……。

「まぁ何とかなるかな……よっと！」

ブォッ！ドガァンッ！！

化け物の頭を更に飛び上がり、そのまま体重の乗った踵落としを脳天に落とした！

「グォォ……」

ズズゥゥン……。

「ふぅ……まぁざっとこんなもんかな……」

俺はそのまま変身を解き、辺りを見回した。

どうも谷底みたいだが、こんなとこに送り込まれたとはな……。

つか、ここは地球なのか？ガキの頃に世界放浪してた時に来たアメリカの荒野に似てはいるけど……。

「あんなバケモンが地球上にいるって聞いたことないけどなぁ……取り敢えずここを出るか……」

俺は考えながら移動したのがいけなかったのか……

「迷ったな、コレ……」

何処を行っても何もない場所に辿りついちまうし、また変なバケモンには襲われるし……。

「やれやれ、バグを消去するどこの騒ぎじゃなくなるぞ、こりゃ……ん？」

辺りをよく見ると、道の先に光が見えた。
ひょっとして出口か？

「ま、考えても仕方ないか……」

俺はそのまま光に向かって走り出した。
出口であることを祈って……。
だが、俺のそんな祈りも甘かったようだ……。

「……世の中、そう簡単にはいかないかなぁ……」

現在、俺は崖から落下中だ……。
光に向かって走ったら勢い余って崖から落ちてしまったのだ……。

「つか、呑気にしてる場合じゃないか……よっと！」

ズドォォォンッ！

俺は再び鬼に変身し、そのまま着地した。

まぁ、その際に足が地面にめり込んでしまったのはご愛嬌（笑）

「……さて、取り敢えず人がいそうなところに向かうかな……」

俺は足を地面から抜き、そのまま人里を探しに向かった。

第1話　魔法世界（後書き）

次回は直哉の設定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1562y/

史上最強の男、魔法世界へ

2011年11月2日23時09分発行